



TITLE:

自由:27 高崎山に生息するニホンザル
の出産個体の採餌における積極
的行動と周囲の許容性(Ⅱ 共同利用
研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

横田, 直人

CITATION:

横田, 直人. 自由:27 高崎山に生息するニホンザルの出産個体の採餌にお
ける積極的行動と周囲の許容性(Ⅱ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研
究所年報 1993, 23: 87-87

ISSUE DATE:

1993-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164426>

RIGHT:

に増加する。大分県の1988年までの林道の舗装延長距離は133kmで、1988年度は19kmとなった。

鳥獣関係統計によれば全国のニホンザルの捕獲頭数は1945年～1954年は千3百頭、1955年～1964年は2千頭、1965年～1974年は5千5百頭、1975年～1984年は2万2千頭、1985年～1989年は4年間で2万7千頭である。

大分県の捕獲頭数は1945年～1989年は0頭、1955年～1964年は61頭、1965年～1974年は543頭、1975年～1984年は660頭、1985年～1989年は4年間で678頭である。

人工造林面積が1962年までの40万 ha にちかい水準から、1985年には10万 ha まで減少し、北海道をのぞく全国の森林伐採面積も1962年以降減少していくなかで、林道開設距離のピーク後4年目の1975年から、全国的にニホンザルの捕獲頭数が急激な増加を始めた。一方、大分県では1966年に64頭の捕獲頭数があり、この時期から捕獲頭数が増加していく。

伐採・造林面積の減少のなかで林道開設量が維持され、さらに既存の林道幅員の拡大と舗装化はニホンザルの生息環境の変化に大きな影響を与えたことが考えられる。

自由：27

高崎山に生息するニホンザルの出産個体の採餌における積極的行動と周囲の許容性

横田直人（大分短大）

本研究は、人工餌場内の出産個体の採食戦略を、採餌行動の積極的姿勢と周囲個体の許容性に注目して調べている。本年度も昨年度と同様の方法で、B群の7～9月の出産期における出産個体（上位個体、下位個体各3頭）と非出産個体（上位個体、下位個体各3個体）とで検討した。

コムギ採餌時のポジション移動回数は出産個体、非出産個体とも約14回/日であった。出産個体のコムギの摂取時間は24.7分/日、1グリッドの平均滞在時間（摂取時間にほぼ等しい）は1.83分/回で、それぞれ非出産個体の約2倍であった。平均摂取速度は出産個体が92粒/分、出産個体が95粒/分と差はみられなかった。コムギからの摂取エネルギーは、出産個体が約270kcal/日（人工餌総摂取エネルギーの57%）、非出産個体は約135

kcal/日であった。

コムギが十分残っているときに周囲の個体からの排除行動がなく、出産個体が移動した回数は全移動回数の27%、非出産個体は45%であった。エサがなくなってから移動した回数は出産個体が全移動回数の37%、非出産個体は20%であった。排除行動がなく移動した回数の中で、出産個体がアダルトオスに追従して移動したものを10%、非出産個体がエサ係の職員に追従したものを15%含んでいる。次に、排除されて移動した回数は出産個体、非出産個体とも全移動回数の9%であった。また排除するための移動は両者とも2%であった。直接的排除行動によるのではなく、周囲個体を気にして移動した回数は出産個体で全移動回数の6%、非出産個体では4%であった。

このように、出産個体は積極的にアダルトオスに接近し、少しでも長く餌場に滞在してコムギを摂取したが、非出産個体はコムギが残っている状況で他のポジションに移動することが多かった。さらに両者とも積極的な排除行動、被排除行動による移動は少なかった。これらのことから、出産個体は周囲個体に気を配り、互いにトラブルを避け、また他個体にも許容されていたと考えられる。その結果、出産個体は非出産個体より1グリッドの滞在時間を約2倍に長くし、コムギを多く摂取した。

自由：28

サルにおける銅付加IUD（子宮内避妊器具）の作用機序

石川睦男・千石一雄（旭川医大・産婦人科）

近代的受胎調節法の中で、銅付加IUDによる避妊は、1）全身的影響が少ない、2）避妊効果が高い、3）可逆性を有し、IUDの抜去により直ちに妊娠可能となる、4）長期的避妊効果がある、などの利点を有し、ヒトのみならず昨今ではサル類にも応用されている。ChangとTatum（1970）はラットのプラストシストを集め、他の偽妊娠マウス子宮内に移したところ、着床し正常に発育したが、子宮内に銅線を挿入されたマウスの子宮腔内に移しても着床発育がおこらなかったことから、銅の避妊効果は受精卵への直接作用ではなく、内膜に対する作用によると報告している。